

俳句雑誌



空

令和5年11月20日発行

第21巻2号

通巻第108号



2023.11

SORA 108号

秋風

柴田佐知子

底なしの青空に飽き一葉落つ

秋風や捨てられしごと秘仏堂

世に出たき秘仏も在さむ昼の虫

痛さうな声出す髪切虫放つ

大花野急ぐ気のなき牛ばかり

その裾を灘へと延ばす夕花野

姫となり公達となり紅葉狩

山城の石積み途切れ夕紅葉

結び目のほどけしやうに霧流る

秘すことは永久に記さず萩の花

一人の家木賊の辺りより暮るる

棉吹くや彼方に古墳あばかれて

濡縁も父もなき世を月渡る



福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

鈴の緒に山の湿りや雁渡る

人好きで通す藤椅子が弾む

冷やかや身を反らし見る行者杉

考へて今と決めたり牡丹剪る

道標ばかりの道や紅葉狩

すぐ戻るかに緑さす置眼鏡

案山子翁見捨てられたるごとく立つ

風鈴や卓に一筆ありがとう

ひとところ雨に崩るる稲架襖

新芽出て落つる櫂の葉恋もまた

磨きたる鎌を拭き上げ秋収め

一面のコスモス手を広げて廻る

大仏に少し貧しき冬紅葉

葉牡丹に忘れたきこと挟みけり

夕焚火男ばかりが集まれり

終となる部屋見廻して夜の長き

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

母亡き家父亡き庭や草紅葉

白木槿しばらく訪はぬ兄の家

集まれば弱者も強し黒ぶだう

迂回路をゆくは旅めく一遍忌

この海の続きに戦火梨を剥く

北斎ブルーの小鉢に浮かべ初紅葉

石けりの石はそのまま秋夕焼

敬老日モンブランケーキ隆々と

虫売りの虫の言葉で話しをり

思はざる声出でしまふ月今宵

萩刈つて雨音すさぶ古刹かな

木守柿下半分を鳥つつく

近づけば死をそそのかす月夜茸

霧深し為さざるものに逃避行

遙かとは先師との距離いわしぐも

たれかれの言の葉うかぶ落葉焚



北九州 深川淑枝

今年藁叩き叩きて注連とせむ

藁叩く匂ひも音もぞぞろ寒

とつぷりと暮れけり土間の砧石

大根蒔く海光とどくなぞへ畑

種採るや羽ち大きく夕鴉

秣切る彼方に青き秋の潮

馬の飲む水にさざなみ小六月

昼の虫すがれて樹下の百度石

広島 戸栗末廣

入り彼岸芥が岸を離れけり

雄々しさと寂しさこもる山桜

白つつじ朝の念仏いづこより

いつしんに猫が爪研ぐ柿若葉

浮き沈みして子子の謀りごと

竹皮を脱ぐ末の子は東京へ

蟻の列鐘撞き堂へつづきをり

サングラス外ししづかな男の目

福岡 角野良生

黄落の真つ只中に本能寺

遠景はいつも美し枇杷の花

片付かぬ部屋に来てゐる十一月

扱き残る朶もろともに注連を緬ふ

鮫鱈の吊らるる前の仏顔

あの人と言ふ隔たりや石路の花

大方の理は妻にあり年用意

冬波に子波孫波曾孫波



空集抄 柴田佐知子抄出

菊炭を焚く白髪に乱れなし

とびついて来さうな函のさくらんぼ

涼しさや空を駆けゆく終電車

銃眼の射程にをりて秋深し

負けさうな顔となりゆく寒さかな

一頭も還らぬ軍馬開戦日

頑なに守る山畑鴟猛る

お年玉貰ひてすぐに数ふる子

透明な棘持つ胡瓜供へけり

食卓は小さな書斎賀状書く

鶴の墓ある山里へ鶴渡る

中田みなみ

”

吉田 律

深川 淑枝

高倉 和子

角野 良生

宮井 知英

吉田 悦子

鈴懸 るい

永淵 恵子

星加 鷹彦

床上げをしてゆらゆらと日向ぼこ

押入れに残暑の籠る宵のうち

祭神の神輿にうつる闇夜かな

零余子採る胸まで藪にはまり込み

無人島といふには広し秋の雲

小春日の駅は旅装の老ばかり

山国は深海の闇冬近し

目を張つて日向へ移る寒雀

寒晴れや肩に画材の食ひ込める

殉教の島に産声星月夜

どん底を覗いて来たるかいつぶり

心地よき恋の痛みや秋の夜

いつもよりゆつくり話し月を待つ

石橋 幾代

曾根 富久恵

秋津 令

坂口 学

今井 康子

森田 明成

原 友子

田中とし江

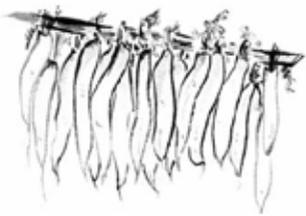
高畑 桂

林 徹也

山本 則男

仲里 奈央

押田 裕見子





日あたるも翳りの色に花八つ手
落蟬の鳴きつくしたる軽さかな
寝起きの顔鏡に見られそぞろ寒
雨上がりの風の匂へり稲の花
穴惑ひ猫に引きずり出されけり
冷房や生きる温度の違ふ夫
飾り山笠戦はぬ殿物足らぬ
黄落や鐘撞けば身の消えてゆく
ほのぬくき秋の簾をしまひけり
落日に蘆の穂絮の吸はれゆく
足指にぬるき泥入る田植かな
小春日やよつさよつさと象の影
五月晴犬に負けじと走りけり
お賽銭弾みましたよ風薫る
シヨベルカーの椅子に野良猫霜の花
菊咲いて昭和の頃の家となり
霧の夜や遠く牛車のきしむ音
落し物したかのやうな秋の暮
何もかも洗ひ流せと銀杏散る
薄い皮破れはせぬか青蛙
稲架掛けと文添え新米が届く
家族揃ふ好きなおでんの具は同じ
保育園に授乳の椅子や秋日和
土用芽や疲れきつたる父の背
空蟬のまだ柔らかき夜明けかな
馬簾なびかせ彦山川を山車渡る

田岡千章
野中みのり
兒玉充代
河原敬子
三井所美智子
伊東希
後藤園子
本多トミ
中村瑞枝
窪みち子
あさなが捷
大西乃子
松井順子
矢野綾子
むつみ蓮
山田正子
荷宮克代
大瀬益太郎
松尾康代
岩崎雅浩
村上二三
石井みゆき
青木朋子
山根可寿志
波止萬里子
日高孝

